東日本大震災とダークツーリズム
The Great East Japan Earthquake and Dark Tourism

井出　明[1]
Akira IDE[1]

[1] 追手門学院大学　経営学部
Faculty of Management,Otemon Gakuin University

The Great East Japan Earthquake was not only a natural disaster but also an atomic accident; the impacted area can be divided into two. Fukushima is an area infected with radioactivity, and other areas like Iwate and Miyagi prefectures have been destroyed by tsunamis. This paper discusses the recovery of tourism from the standpoint of each situation. Then, an overview of tourism in the aftermath of the Great East Japan Earthquake will be provided.

***Keywords**: Dark Tourism, Urban Truism, Recovery*

1. はじめに

東日本大震災からの復興を観光面から考える場合、どのようなアプローチが存在するであろうか。方法論としては、いくつか考えることができよう。例えば、研究者が自分のディシプリンに基づき、経済学・経営学・交通政策などの観点から地域の復興について述べるという手法は当然あってしかるべきである。但し今回は、あえて別の手法を採用することについて考えてみたい。

東日本大震災は、単なる自然災害という側面だけでなく、原発事故という意味合いも有している。自然災害と原発事故という 2 つの視点から今回の震災を考えてみた場合、被災した地域を２つに分けることができる。一つは、福島県を中心とする未だ放射能汚染からの除染が進んでいない地域である。もう一つは、被災地として物理的破壊を受けてはいるが、直接放射能汚染の被害を受けていない宮城県や岩手県を始めとした福島以外の地域である。本稿では、これら２つの地域を明確に分け、個別に復興の方向性を探ることにする。その上で、東日本大震災を踏まえた今後の観光政策の全体像について言及する。なお、この予稿は運輸調査局発行の『運輸と経済（2012 年 1 月号）』に発表した「東日本大震災後における東北地域の復興と観光について－－－－イノベーションとダークツーリズムを手がかりに－－－－」のダイジェスト版である(1)。

2. 福島地域の復興と観光について

(1) 短期的対応

まず短いスパンで福島の観光振興について軽々に論じるべきではないであろう。その理由としては、第一に放射能の問題がある。日本の観光政策のキーワードとして、「住んでよし、訪れてよしの国づくり」という言葉があるが、福島の転出人口は、震災発生以来ハイペースで推移しており、特に若年人口の流出が著しい。このような現状では、「住んでよし」とは言い難いものがある。そうであるとすれば、「訪れてよし」にも成り難い。実際、現地の観光に関連する方々も短期的な観点での観光復興が難しいことを十分に認識しておられた。

(2) 長期的対応

次に長期的な対応について考えてみたい。現在観測されている放射線量も、やがては低下していくであろうし、またそうなってほしい。ここでは原発問題が終息した未来に備え、どのような準備をしていくべきかという点から論を展開する。

(ⅰ)ブランドの創造

福島地域のブランド価値を向上させる手法としては、方法論そのものをブランド化してしまうというアプローチが考えられる。この手法は、松坂牛に典型的に見られるノウハウであるが、その地域で産出されるものをブランド化するのではなく、その地域で培われた技術的方法論をブランドとして育てていくというものである。農産物そのものへの信頼性が戻らない現状において、農産物の“地産”と切り離し、“福島のブランド”としてアピールできるものを早い段階で開拓しなければならない。

(ⅱ) 観光形態としての“ダークツーリズム”

福島の今後の観光復興を考える際に、重要な観光形態がある。それは“ダークツーリズム（Dark tourism）”と呼ばれる観光形態であり、欧米の観光学ではすでに研究対象として取り上げられている(2)。この観光形態は、観光を“楽しいもの”“愉快なもの”と考えるのではなく、学びの手段として捉えるものであり、“死”や“災害”と言った人間にとってつらい体験をあえて観光対象とする新しい観光のカテゴリーである。

現在、福島は、人類史上未曽有の経験を蓄積しつつあるが、回復までの長い時間をかけて、新たなる“価値を創造”する必要があろう。創造される価値の核心は放射能汚染からの回復過程であるが、その回復の過程は、単なる自然科学的な意味での回復にとどまらず、より広い意味での社会的なイノベーション（変革）としての側面を有しているといえよう。

また、この地には自治体単位で全域避難となった人々が県内複数箇所に集住している。この先、補償問題が現実化してくるにつれ、人々の間に不公平感も発生してくると思われる。被災地の一体性をどのように確保していくのかという意味で、この地の自治体経営は非常に難しいものになっていく。

こうした複雑な事情を持つ地域は世界的に見ても稀である。放射能汚染から地域が回復していく過程は、この広い世界を見渡してみても、ここでのみ学べるコンテンツと言ってよい。この回復過程こそが、only-one コンテンツとなりうるのである。

２．福島以外の被災地の観光と復興について

(1) アーバンツーリズムのあり方

今回の震災には、阪神・淡路大震災の復興モデルがそのままでは使えないとよく言われているが、“人と防災未来センター”の設置のように、もちろん参考になる事案もあるはずである。特に仙台という東北の拠点都市をどのように活性化させていくべきかという点については、阪神・淡路大震災の経験は有益な示唆を与えてくれる。

阪神・淡路大震災の復興における反省として、都市文明の継続性に十分な注意を払わず、ハードの復興を優先させてしまったという問題点がよく指摘されている。これは具体的には、文化行事への支援を怠ってしまったことと、都市部に住む中間層の住民に対して十分なサポートがなかったことを意味している[(3)]。

仙台は東北文化の中心であり、仙台の都市文明としての力が強まることによって、東北全域の文化・文物が仙台に集積することとなる。この地が東北全体へのゲートウェイとしての機能を果たし、仙台を訪れた観光客が次に東北のどこかに旅するような仕掛けを組むことが重要である。

そのための方策として、国際会議を始めとするコンベンション（国際会議や見本市）を誘致することは非常に効果的である。コンベンション参加者を海岸の被災地や福島地域に案内するエクスカーションを準備するという企画も非常に意義深い。このような経験は世界で唯一、仙台でのみ可能となる。仙台は東京・京都・大阪そして世界的にはニューヨーク・パリ・上海などと比べても、全く異質なブランド力を持ち、インスピレーションにあふれた“創造都市”にイノベートされる可能性がある。

(2) 津波とダークツーリズム

福島以外の被災地においては、東日本大震災は主に津波災害として受け取られている。したがって、津波災害について集約的に学ぶことのできる博物館的な施設を作ることは、国内外を問わず社会的な意義が大きい。

この度の被災で特に甚大な被害を受けた宮城・福島・岩手の各県のうち、福島については、前章で述べたとおり原子力災害を教訓とした観光開発を探求することになるし、宮城は前節で示した仙台を中心としたアーバンツーリズムで東北の観光を牽引する役割を担わなければならないため、津波のダークツーリズムは岩手県が担うべきであろう。実際、三陸海岸は、ユネスコの Geopark の認定を受けるべく活動している。

３．総括と展望

本稿では、福島県とそれ以外の被災地をわけ、今後の復興の方向性について論じてきた。最後に、この度の震災を契機として考えだされる新しいタイプの観光は、単純な復旧や復興を意味するのではなく、新しい価値を創造することに主眼がおかれるべきであることを強調しておきたい。災害という大きなインパクトを受けた人や地域を、災害以前の状態に戻すことは非常に難しく、物理的な面で復旧が成し遂げられたとしても、そこに住む人々の心やコミュニティは以前とはかなり異なったものになっているはずである。したがって、そこで作られる社会は、これまでとは異なる「新たな社会」であり、そこでは復旧・復興を超えた新たな価値創造を伴うイノベーション戦略を考えなくてはならない。これまでの復興論では、「戻す」ことばかりに議論が傾きがちであったが、今後はイノベーションの観点から被災地の観光復興を考える必要性があるのではないだろうか。

参考文献

(1) 井出明「東日本大震災における東北地域の復興と観光について－ イノベーションとダークツーリズムを手がかりに－ 」『運輸と経済』2012 年 1 月号 Vol.72No.1 運輸調査局 p24-33

(2) Lennon, J., & Malcolm Foley, M. (2000). Dark tourism—the attraction of death and disaster. London and New York: Continuum.

(3) 高坂健次「進む階層化社会の中で「被害の階層性」は克服できるか－ 総資産 5000. 万円の壁をどう考えるか－ 」『世界』2005 年 12 月号 No.746 岩波書店 p190-198